

『ロビンソン・クルーソー』というイギリス小説の〈始まり〉

——非国教徒・商人・中産層

土屋 倭子

はじめに

イギリス小説が『ロビンソン・クルーソー』(二七一九)から始まるとされることは、イアン・ワット『小説の勃興』(Ian Watt, *The Rise of the Novel*, 1957) (1)の画期的な研究以来、広く受け入れられている。ワットは小説(novel) (新奇なもの)とされる文学形式が『ロビンソン・クルーソー』に始まることを、主人公クルーソーの宗教的個人主義と経済的個人主義を特徴とする心の内面がフォーマルリアリズムと彼が呼ぶ形式(登場人物の経験や物語の細部が具体的な時と場所を示して語られ、その主題にふさわしい平易で明晰な散文で書かれた)で実現したと言う。こうしたデフォーの著作は新しく台頭した中産層の読者層によって受け入れられ、小説はその後イギリスで最も重要な文学形式となっている。ワットの研究は今日においてもイギリス小説の勃興を考える基礎的な論考となっている。

主人公クルーソーを特色づけるのは宗教人として、そして経済人としての特質だという指摘は『ロビンソン・クルーソー』論の基本的な出発点であろう。マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(一九〇四―五)の流れを汲む大塚久雄の『近代化の人的基礎』(一九六九)においても宗教人、経済人としてクルーソーが分析されていて、今日ではもはや古典的な解釈として片付けられることも多い。

マーティン・グリーンの『ロビンソン・クルーソー物語』(Martin B. Green, *The Robinson Crusoe Story*, 1990) は、

の物語に新しい展望を与えたとと言える。グリーンに大いに啓発されたという岩尾龍太郎の『ロビンソン変形譚小史』(二〇〇〇)はデフォー以来のこの物語の変形作品の歴史を辿る。岩尾はデフォー以後の変形譚を四期に分けて分析する。第一期(一七二〇—一七六二)——直接的模倣譚、第二期(一七六二—一八二二)——教育的ロビンソン、第三期(一八二二—一九〇四)——冒険ロマン的ロビンソン、第四期(一九〇四—現代)——寓意的あるいは反ロビンソン、と区分してそれぞれの時代のロビンソンの特質を探り、それぞれの時代の変形譚が時代の思想と深く関係すると言う。グリーンや岩尾の研究は現代の読者に実に興味深い『ロビンソン・クルーソー』変形譚の歴史を見せてくれる。グリーンによるとジャン・ジャック・ルソーが教育論『エミール』(一七六二)でエミールに究極の一冊として勧めたのはデフォーの『ロビンソン・クルーソー』であった。しかしそれはルソーにより根本的に改変されたものであったと言う。ルソーは物語中の自分の思想に無意味なものは一切除いた。すなわち『ロビンソン・クルーソー』第一部の「ロビンソンが島に到着する以前と島を去った後の部分は省略され、第二部、第三部はそもそも対象にもならなかった……ルソーが残したのは、もっぱら生存と仕事という主題に関する知的・文学的に独創的な部分だった。……難破船及びそこからロビンソンが新生活出発発のために搬出したものを最小限にした。ルソーの力点は自助(self-help)にある」。②) こうしてルソーによって改作された『ロビンソン・クルーソー』は世界的に著名な教科書、世界文学の読むべき一冊となったと言う。

岩尾が論じている現代のロビンソン変形譚も興味深い。M・トゥルニエ『フライデーあるいは太平洋の冥界』(Michel Tournier, *Vendredi*, 1967)に見られるように、ここでは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に基づいて行動するクルーソーは徹底してパロディ化される。クルーソーが築き上げる秩序は揶揄され、フライデーは忠実な家来になるどころか、クルーソーが苦勞して築き上げたものを面白がって破壊する。大事な火薬庫まで爆発させてしまう。そして故国から船がやってきたとき、クルーソーは野生の島に残り、フライデーは密かに船に乗り込んで文明世界へと去っていく。フライデーと入れ替わりに、船で虐待されていた少年水夫がクルーソーの元へと逃げ込んでくると言う余談までついて。文明と野生はその価値観を根底から覆されていると言える。

J・M・クッツエーの『敵あるいはフォー』(J. M. Coetzee, *Foe*, 1986)には舌を切り取られて、言葉を話すことができないフライデーが登場する。フライデーは、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』においても自分の言葉を話

すことはないし、クルーソーに教えられた英語を繰り返すだけであつたのだが、『敵あるいはフォア』では、まさに「フライデーは語り得ないということが語られる物語」⁽³⁾となる。デフォアの『ロビンソン・クルーソー』ではフライデーは人食い人種の蛮人であり、クルーソーの家来であり、奴隷であり、支配された「モノ」でもあつた。フライデーには舌があつたけれども、舌がないのと同じ状況に置かれていた。しかし彼に舌があつても無かつたのと同じであつたことが指摘されるにはクツツエーまで待たなければならなかつたと言えよう。

このようにロビンソン変形譚をたどることは、一七一九年以後の人類の思考の歴史をたどることにもなる。それはまた三百年におよぶ壮大なイギリス小説の歴史と重なる。それはコロニアリズムからポストコロニアリズムへと至る時代、リアリズムからモダニズムを経てポストモダニズムの混沌へと至る時代でもある。そうしたイギリス小説の流れを視野に入れた上で、ここで筆者はあらためてデフォアの『ロビンソン・クルーソー』が生まれたコンテクストを考えてみたい。『ロビンソン・クルーソー』とはどのような状況で書かれた書物であつたのか、そのメッセージは何であつたのか。そしてその後のイギリス小説の伝統から考えた時にどういう〈始まり〉の意味を持つのだろうか。それは源泉としてその後の小説になんらかの関わりを持たなかつたはずはないからである。

はつきりしていることは、『ロビンソン・クルーソー』は小説の〈始まり〉とされているが、デフォアは小説というジャンルを意識して書いたわけではない。小説というジャンルはその時まで存在していなかつたのだから。彼の小説とされる一連の作品は晩年になって書かれたものであり、それまでのデフォアは非国教徒の商人として活躍し、今日というジャーナリストとして多産な文筆活動をしていた。現在彼の小説とされている書物はそうした彼の多方面にわたる執筆活動の集大成として考えられるものである。

後述するがデフォアは大真面目に『ロビンソン・クルーソー』はクルーソーの自伝であり、各部の序文でこれらの話が実際に起こつたことをそのままに書いたものであり、道徳的な教訓を与えるためのものと書いている。デフォア自身はフィクションを書いているのだが、クルーソーの自伝という形をとることで、話に信憑性を与え、教訓を与えるという目的にふさわしいものとしたのである。クルーソーはデフォアの作品の作中人物のだが、物語の内容と構成はかなりのところまでクルーソーがデフォアの代弁者であると考えられる。

あの多彩で多産な、想像を絶する活躍をしたデフォアについてここで論じる資格は筆者にはない。ここではイギリ

ス小説の〈始まり〉としての『ロビンソン・クルーソー』を理解するために、大切な三点に焦点を絞ってデフォーをとらえ『ロビンソン・クルーソー』の特質とその後のイギリス小説との関係を考える。非国教徒、商人、中産層が『ロビンソン・クルーソー』の生成とその影響を解く鍵の言葉となる。

一 非国教徒

○非国教徒ダニエル・デフォー

デフォーは一六六〇年にロンドンのクリップルゲイトで生まれた。父親は獣脂ろうそく業者で非国教徒（デイセンターで長老派教会）であった。商人であり、非国教徒であるという烙印はデフォーが生まれた時から捺されていた。デイセンター（Dissenter）とは時にノンコンフォーマリスト（Non-Conformist）とも呼ばれるが、本来の語の意味は同意しない人である。この言葉には歴史的な背景がある。

エリザベス一世の時代に成立した「礼拝統一法」（The Act of Uniformity）（1559）は国教会の礼拝、典礼以外のやり方を否定し、国教会の三九個条からなる祈祷書（The Book of Common Prayer）を強制するもので、これにより国教会の礼拝法が確立された。エリザベス女王はヘンリー八世が一五三四年に制定していた「首長法」（The Act of Supremacy）を直ちに再度制定して、礼拝統一法とともに王を教会の長とするイギリス国教会制度を完成させ、これにより国教会体制が出来上がったとされる。この「礼拝統一法」が施行された時、宣誓を拒否して国教会を離れた聖職者と呼んだのが、そもそもの語の始まりとされているが、イギリスでは時に広く国教徒でない者に対しても用いられている。

当時の非国教徒が置かれていた状況について、またデフォーの全著作について塩谷清人『ダニエル・デフォーの世界』（二〇一七）は詳細な研究書となっている。⁴この書によれば王政復古時のロンドンの人口は約五〇万、イングランド全体の人口約五〇〇万の割を占めていた。ロンドン市民の約一〇分の一、五万人が非国教徒であったとされている。いわゆるシテイ内の市民は五分の一が非国教徒であったとされるから、商人などには特に非国教徒が多かったということであろう。

このようにデイセンターであり、商人の家庭に生まれたデフォーは一四歳から一九歳頃までチャールズ・モートンが主宰したモートン・アカデミーで学んだ。これは非国教徒の子弟に門戸を閉ざしていたオックスフォードやケムブリッジの大学の代わりに作られた高等教育を目的としたデイセンティング・アカデミーであった。ここで受けた教育がデフォーの生涯を決めたと言われる。このアカデミーでは古典語のラテン語やギリシヤ語も教えたが、当時としては珍しく英語教育を尊重し、進んで物理学、天文学など近代の自然科学を教えた。

デフォーの父はこうしたアカデミー設立の目的がそうであったように、息子をプレスビテリアン派の聖職者にしたかったようだが、デフォーは結局、父と同じ商人の道を選ぶことになる。こうして非国教徒であり、商人であるという根っこをしっかりと持ったデフォーは若年より、文筆家としても活躍を始める。雑誌や冊子に書くという今日でいうジャーナリスト的な仕事から、政治、社会、経済、外交、宗教、道徳など多岐にわたる諸問題の評論家として、そして晩年には小説家としての活躍まで、その仕事は瞠目させるものがある。彼の著作は膨大であり、いまだにその全てが解明されていないと言われる。政治的には、時に複雑で曖昧な立場に立ったと批判されるデフォーであるが、彼の非国教徒としての立場と商人として交易の発展にかけた情熱は終生変わらず一貫していた。

デフォーが生まれた一六六〇年に始まった王政復古の期間を通して、国教会の保守派による非国教徒差別の法案が通過した。カトリックに寛容であったチャールズ二世への対応もあったのかもしれないが、国教会体制確立のためには保守派にとってはどうしても必要な措置と考えられたのであろう。

「秘密集会禁止法」(The Conventicle Act) (1664)、「五マイル法」(The Five Mile Act) (1665) (宣誓拒否をした聖職者が以前説教した教区の五マイル以内に入ることを禁じた法)などが制定された。これによりイギリスでは church ではなく chapel での集会が開かれるようになった。いわゆる chapel 派の登場である。そしてこのような非国教徒差別に決定的な影響を与えたのが「審査法」(The Test Act) (1673)であった。これは地方、中央の官吏になるためには国教を信奉するという宣誓を求めるもので、非国教徒は自分の信仰を守ろうとするなら、公職に就くことができなかった。名譽革命が成功し、ウイリアム三世とメアリー二世の共同統治となったイギリスでは「権利の章典」(Bill of Rights) (1689)と共に非国教徒らに対する差別をなくす目的で「寛容法」(The Toleration Act) (1689)が成立していた。その後はなんとなく「便宜的国教遵守」が容認されていた。非国教徒は年に一度だけ国教会の聖餐式を受けることでそ

の資格を得るという便法で、広く受け入れられていたが、デフォォーはこれには反対していた。しかしこのやり方も国教会側からは厳しく非難され、このようなことは放置できないとして、「便宜的国教徒禁止法案」(The Occasional Conformity Act) (1711) が何度も提出された。法案はやっと成立したが、厳密に施行されることなく、一七一九年に廃案になったという。ただ「審査法」は一八二八年に廃止されるまで続いたから、長期間にわたって非国教徒が公職に就くことは禁じられていた。こうした差別の中でデフォォーは非国教徒の立場に立った発言を活発に展開したのである。

その最も過激な内容でよく知られているのがデフォォーの「非国教徒撲滅のための最も簡単な方法」(The Shortest Way with the Dissenters) (1702) である。これは厳密に書くと (The Shortest Way with the Dissenters: or Proposals for the Establishment of the Church) となっていて、デフォォーは匿名で国教徒の立場をとって、非国教徒を地上から抹殺せよと説いた。

デフォォーの狙いは国教徒の非国教徒に対する差別と暴虐を非難することにあつたのだが、作者がデフォォーと分かつた時には国教徒側と非国教徒側の両方から激しい非難を浴びることになった。国教徒側は自分たちのやり方があまりにも誇張されて非難されていると感じたし、非国教徒側は自分たちの味方と信じていたデフォォーが、ここまで相手の論理で自分たちを排斥していることに怒りを覚えたのだ。

デフォォーは訴えられ、友人宅に身を隠していたところを捕らえられて、一七七三年七月二九日から三日間連続で一時間、コーンヒルのロイヤルイクスチェンジ、チープサイド、テンプルバーで晒し台に立たされることになった。だが、この晒し台の一件は彼の子想外の結果になった。晒し台の周りを支持者が囲んで、花束が投げられた。デフォォーは非国教徒側を代表する英雄として、民衆の中の非国教徒たちから支持を得ていたと言えよう。その後の長い文筆活動を通してデフォォーの非国教徒としての立場は終始一貫変わることはなかった。

○『ロビンソン・クルソー』の構成とプロテスタントイズム

『ロビンソン・クルソー』(The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, 1719) というこの世界的に有名な、子供でも知っている物語は、実はデフォォーが書いた作品の第一部に過ぎないことは、今で

は衆知のことだ。第一部は一七一九年四月五日に出版されるや評判となり版を重ねた。続いて八月二〇日には第二部『さらなるロビンソン・クルーソーの冒険』(*The Further Adventures of Robinson Crusoe*, 1719)が出版された。四ヶ月後のことである。デフォーは第一部が出版される前から第二部『さらなるロビンソン・クルーソーの冒険』を書き始めていたとされている。(6)そして第三部『ロビンソン・クルーソーの反省録』(*Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, 1720)は翌年の八月に出版された。

第三部が続けて出版されたことについて、マクシミリアン・ノヴァクはこのような形で第三部が続けて出たのは不思議だとして三つの理由を挙げている。第一は出版社主ウイリアム・テイラーの要請ではないかとする。『ロビンソン・クルーソー』や『さらなるロビンソン・クルーソーの冒険』の省略版を出したT・コックスはこの本が本当に水夫によって書かれたものとは思えないと疑義を挟んだし、デフォーの論敵チャールズ・ギルドンは『ダ……デフ……氏の生涯と驚くべき冒険』でデフォーが真の書き手だと暴露し、その中の間違いや矛盾を指摘した。こうした攻撃を受けて、テイラーから頼まれたのではないかとする。第二は第一部と第二部の好評にあやかっつて、デフォーがもう少し金儲けをしたかったのではないかとする。そして第三は自分の作品がいわば海賊版として世に出回ることによって立てたデフォーが第一部、第二部をそのような被害や非難から守るために、それまで書きためていたものや、今後書こうとしていたものを宗教的な主題にまとめて第三部の一部としたのではないかと推察している。(7)後述するが、第三部は前の二部とは全く異なった構成になっている。

しかしこれらの三部が上述したように比較的短い期間に次々と関連して出版されていることは事実であり、この時点でのデフォーの中では三部は一つのまとまった作品として存在していたと思われる。第三部では第一部や第二部で起こったことへの言及も時々ある。このように短期間に三部が続けて書かれ、第三部の序文には第一部や第二部への言及も付されていることから、第三部を除外したものを『ロビンソン・クルーソー』と断ずることは無理であろう。まして巷間で受け入れられているように、第一部のみを『ロビンソン・クルーソー』とすることは作者の意図に反すると考えられる。ここでは第一部、第二部、第三部をまとめて『ロビンソン・クルーソー』と考える。

まず第一部についてだが、父の忠告にもかかわらず水夫になったクルーソーの冒険が描かれる。その中心は孤島に流れ着いたクルーソーの生き残り作戦の体験である。フライデーを忠実な家来として島の支配者になったクルーソー

は二八年余を生き延びてイギリスに帰国する。

第二部は帰国したクルーソーが自分の島を見たくなくなり、再び航海に出て冒険を続ける話である。クルーソーは原住民に襲われてフライデーを失い、ブラジルに所有していた農園を訪ね、マダガスカル島、ベンガル湾、東南アジア、台湾などを経て支那の北京へ行く。そこからシベリア、タタール地方（東欧からアジアにわたる地方）、ロシアを経て、ハンブルグ、ハーグ経由でロンドンに戻る。これも一〇年と五ヶ月に及ぶ世界一周の冒険旅行の話である。

第三部は冒険物語ではなく、船乗りから足を洗ったクルーソーが市井の人となつて書いた反省録となつてゐる。第一章「孤独について」第二章「誠実さについて」第三章「不道德な会話と下品な言動について」第四章「世界における宗教の現状について」第五章「神の声を聞くことについて」第六章「世界におけるキリスト教徒と異教徒の比率について」となつていて、付録として「天国についての一つのヴィジョン」が付されてゐる。物語全体が三部構成になつてゐるわけで、第三部が締めくくりのように置かれてゐることがわかる。第一部からクルーソーと神との霊的対話が繰り返されるのだが、第三部はその対話の集大成という構成にもなつてゐると考えられる。

三部それぞれの部には序文が付されてゐる。「物語はじめに、はじめに述べられてゐる。そして、世の賢い人々がいづもそうするように、事件を宗教的な効用にあてはめて述べられてゐる。つまり、ここにある実例をとおして他の人々を教化し、われわれの境遇がどんなふうに変わるにもせよ、そのあらゆる変化のうちにあつて摂理の知恵をよしとし、また、たたえんがために述べられてゐるのである」（傍線筆者）⁸。これは第一部の序文であるが、ここで強調されてゐるのは、これが本当の話であること、まさにあるがままに書かれたこと、そして何よりも人々を教化するために、神の摂理を教えるために書かれたということだ。

第二部の序文も同じ調子である。「この第二部は、第一部と同じくらいあらゆる点において興味津津たるものがある。……もしこの書を短くしようとする者があれば、価値を減ずるばかりでなく、宗教的および倫理的な思索を本書から一掃してしまうことになりかねない（これは中身を短縮して出版された海賊版への怒りを示すものと指摘されてゐる）。これらの思索こそ、実は、本書の最大の美点であるばかりでなく、読者を無限に啓発する意図を持つて述べられてゐるものなのである」（四）（傍線筆者）。

そして第三部では、第一部と第二部が「心の底から人類全体の幸福に役立つことを願ひ、できる限りまじめに役立つ

ててもらえるように意図されたものであり、本書(第三部)もその目的に沿って書かれていることをはっきりと述べておきたい(傍線筆者)とある。

こうして三つの序文をとおしてクルーソーは本当の話をまじめに書いたものだ、狙いは読者に神の摂理という教訓を与えることだと強調する。こうした特徴は『ロビンソン・クルーソー』がデフォーによって数多く書かれたコンダクト・ブックの延長線上にあるのではないか。そうとらえたときにデフォーの意図がよりはっきりと見えてくるのではないかと筆者には考えられる。

それでは第一部から第三部までクルーソーが序文で繰り返す教えとはどのようなものか。よく指摘されるように、冒頭でクルーソーは父の教えに背いて水夫になる。父の教える賢人の言葉とは箴言第三〇章は八―九節の「我をして貧からしめずまた富しめず、唯なくてはならぬ糧を與へ給へ、そは我あきて神を知らずと言ひエホバは誰なりやといはんことを恐れ、また貧しくして窃盜をなし我が神の名を汚さんことを恐るればなり」で、こうして全体の物語はまず聖書の教えに背くという枠組みにはめ込まれているのだ。

第一部の中心は孤島での物語になる。一六五一年九月一日にハルからロンドン行き船に乗ったクルーソーは様々な冒険を経て八年後の同じ九月一日にブラジルの農園から奴隷貿易のために手頃な雑貨を積み込んでアフリカ海岸を目指して出航した。出港後間もなく大嵐にあり、クルーソーはオリノコ川沖のトリニダード南東、カリブ海の名もない孤島にただ一人流れ着く。

この話は当時有名だったアレクサンダー・セルカークの体験がもとになっているとされる。スコットランド人の船乗りセルカークが、南米チリから六〇〇キロも離れた太平洋のファン・フェルナンデイス島に一人取り残され、四年四ヶ月後に救出されるまでの生活は雑誌で広く知られていた。セルカークが島にライフル銃、弾薬、煙草、ナイフ、聖書などを持ち込み、ヤギの皮で衣服を作り、孤独の中で聖書を読むことを習慣にしたという点はクルーソーに似ている。セルカークが島で暮らしたのが四年四ヶ月であったのに、クルーソーは二八年二ヶ月と一九日間島にいたことになっている(三七〇)。

デフォーがセルカークの話からヒントを得たことは明らかであるが、大切なことはデフォーがこの話を自分の意図した物語に書き換えたことである。特に第一部ではクルーソーは驚くばかりに度々自己の運命を呪っては、神の摂理

に目覚めて回心する様子が描かれる。物語の核心には常に神の摂理に目覚めるクルーソーがいる。神の摂理を教えるという物語の意図は一貫している。

クルーソーは孤島で涙を流しながら思う。これは「この絶海の孤島でひとり死んでゆけ」と言うことではないか。それが「天の配剤」なのか。「しかしそう思う、と同時に、そのような私の気持ちを押さえつけ、叱りつける考えもつねに起きるのであった」(八八)。

病に襲われたクルーソーは絶望の中で初めて神に祈ったと書く。「そうでない時には、私は信仰のことに暗いので、なんといつて祈って良いかわからなかった。私はただ横になったまま叫ぶだけであった。『主よ、われを省みたまえ。主よ、憐れみたまえ。主よ、われに恵みをたれたまえ』と」(一一二)。クルーソーは初めて神に祈り、次のように続ける。「悲しいことだが、私は神についての知識をもつてはいなかった。父のねんごろなみちびきによって私がえていたものも、八年も永いあいだふしだらな船乗り稼業をしていたのと、私と同じくひどくすさまじった、神を神とも思わぬ連中とばかり絶えずつき合っていたために、きれいに跡形もなく消えうせてしまっていた。私はずっとこの間、仰いで神をみ、省みては自分の生活を思うと言う殊勝な考えを一度もいだいたことはなかったと思う」(一一二)。

クルーソーはまさに信仰の何たるかもよくわからない市井の一人として孤島の生活を始めたのだ。そのクルーソーが回心して信仰に目覚めていくプロセス、これこそデフォーが細心のリアリズムの方法を用いて描き出したものであった。

こうしてクルーソーは聖書を取り出して読み始める(一一三〇)。しかし次は最もしばしば引用される箇所なのだが、このクルーソーの信仰もある日砂の上に人の足跡を発見したときに吹き飛んでしまふ。「私は恐怖のあまり、神により頼む敬虔な心を失ってしまった。考えてみれば神に対するそれまでの信頼は、すべて神の恵みに私が不思議にも浴してきたという事実にもとづいたものであった。それが、今きれいに消えうせてしまったのだ」(一一二二)。これはクルーソーの回心がいかに適当な、いい加減なものかと言う例としてよく引き合いに出される。その後クルーソーは再び反省して聖書を取り出し、感謝の念に溢れて聖書を読み始めるからだ。その後クルーソーはまた神を疑う。この繰り返しはクルーソーの回心がいい加減だとしてしばしば多くの批評家から指摘されてきた。しかし回心したり、また神を忘れたり、再び神の恩寵を感謝したりする、まさにその状況が描かれるところにこそデフォーのリアリズムの意味が

あるのではないか。ここにこそ時と場所の具象性を備えた中で一人の人間の心中の不安と救いに揺れ動く葛藤と苦悩の相が迫真的に描かれることになったのではなかったか。クルーソーの回心が曖昧だということに意味があるのではない。こののたうちまわるクルーソーの曖昧さをかかえ込んだ心理を描いたところにイギリス小説のリアリズムが始まったということではなかったかと筆者は考える。

蛮人たちのあさましい食人行為を知るにつれて、クルーソーは自分が危うくその犠牲にならなかつたことを改めて神に感謝する。しかしなんとかして島を脱出したいと願うあまり、彼は再び懐疑心にとらわれる。「すべてを神の摂理にゆだね、その決定のままに従うという、私のかねての平静な心も今や宙にういてしまっていたのだ。本土へ渡るといふ計画以外のことを考えようとしても、もう私には考える力がなかつた」(二六五—六)のだ。再びクルーソーは迷い始める。

しかしフライデーという家来を得て、彼をキリスト教徒にしようと教え始めたときによくクルーソーの信仰がしっかりとしたものになる様子が描かれる。「今や神の摂理のもと、一人のあわれな野蛮人の生命とおそらくは魂までも救い、永遠の生命の源であるキリスト・イエスをしらしめんがため、宗教について、キリスト教について、その真実な知識を彼に教える、一人の媒介者と私になりえたのだ。そうだ、こういつたことを考えたとき、あるひそかな喜びが私の魂の隅々までみなぎることを感ぜざるをえなかつたのである」(二九五)とクルーソーはフライデーとのその後の生活が感謝に満ちた幸福なものであったと述べる。

そして次のように締めくくるのだ。「このさいどうしてもこの島での隠遁生活の体験からしるしておきたいことがある。それは神について、キリスト・イエスによる救いの教義について、その教えが神の御言葉としての聖書の中にはつきりとするされておりなんの苦勞もなしに理解できるといふことはなんとというすばらしい、言語を絶した祝福であろうかということである」(二九六)。これこそ聖書を唯一の神との繋がりとするプロテスタント、デフォアの心からの告白であろう。

こうして『ロビンソン・クルーソー』第一部はクルーソーの回心に至る信仰の書であるとともに、異教徒フライデーをも改宗させる意義を強調した、プロテスタントイイズムの実践物語という姿を顕すのだ。

第二部では信仰に関する言及はかなり減り、そのぶんだけ海や陸地での冒険に重点が移る。しかし頻度は少なくなつ

たとはいえ、宗教はやはりこの部を通して重要な主題であることに変わりはない。それは序文でも触れられていることは先に見た通りである。クルーソーが自分の島を再訪する航海上で救助した人たちの中にフランス人の聖職者がいた。彼はローマ・カトリック教徒であったが、クルーソーはこの聖職者が実に宗教心の篤いことにいたく感動する。

プロテスタントの立場から紹介すると断つて、クルーソーは書く。「第一にこの人はペイピストであったし、第二にカトリックの司祭であったし、第三にフランス人のカトリック司祭であった。しかし、彼の人柄を正当に評価しなければ公正にもとると私は思う。彼は謹厳でまじめで敬虔で非常に宗教心のあつい人であった」(一四八)。

クルーソーは続ける。「彼の敬虔な心や真摯な熱意がかくも大きいのを知って私は驚嘆した。自分の宗派、つまり自分の教会についても話が驚くほど公平であること、また知りもしなければ縁もゆかりもない他人を守ろうとする誠実な熱情をもっていること、に対しても驚嘆した。彼は、実に、神の法を彼らが犯すのを極力防ごうという熱情に燃えていたのである。こういった熱情は私が未だかつていかなる所においても見たことのないものであった」(一五八)。司祭は続けて、この島の住人をキリスト教に導くことができたなら、二度と生まれ故郷が見られなくとも良いし、自分はこの哀れな人々の魂を救うという仕事ができることに生涯キリストと聖母マリアに感謝の祈りを捧げるつもりだと述べて、クルーソーを感動させる。

クルーソーとこのカトリックの司祭との会話は旧教徒と新教徒、そして異教徒の話になり、クルーソーはこの司祭との会話を通して、旧教徒も新教徒ともに理解し合えるのではないかという考えを披露している。この旧教徒と新教徒の間の、あるいはキリスト教徒の宗派間の様々な恐ろしい争いについては『ロビンソン・クルーソー反省録』でもしばしば取り上げられているから、ここにはプロテスタントとしてのデフォーの本音があると考えられる。非国教徒としてデフォーは宗派間の争いいつも苛立っていた。

ただし注目すべきことは、ここで司祭の言葉として、キリスト教徒と異教徒とは厳然と区別されている点である。旧教徒にも新教徒にもキリストの恩寵はおよぶであろうが、異教徒は別であるとする。「彼らは神も知らず、キリストも知らず、贖罪主も知らない蛮人であり未開人」(二八二)なのだから。

かくして『さらなるロビンソン・クルーソーの冒険』の後半において、タタール地方での冒険旅行の途中では、クルーソーは異教徒への憎しみを隠さない。モスクワ帝国の最初の都市にたどり着いた時にクルーソーは漏らす。「私は、こ

んなにも早く私の言うキリスト教国に、少なくともキリスト教徒が統治している国に、到着したことに無限の満足感を覚えないわけにはいかなかった」(三四七)と。

クルーソーは私のように世界を旅してきた者はキリスト教徒の世界がいかに異教徒の世界と違っているかを感しているとして異教徒の世界を次のように決めつける。彼らの世界とは「天によって見放されて度すべからざる迷妄に陥った人間どもが、ひたすら悪魔を拝み、木石の前にひれ伏し、怪物や池水火風や恐ろしい動物の像や怪物の彫像・画像を拝む世界」(三四七)であると。「われわれが通過した町や都市には、例外なしに、塔があり、偶像があり、寺院があった。無知な住民は自分たちの手で作ったものさえもそこでは拜んでいた」と侮蔑している。

クルーソーが通過したロシア辺境の地では「偶像に犠牲をそなえたり、太陽、月、星その他大空のあらゆるものを礼拝すると言うふうであった」(三五〇)。クルーソーは怒り心頭に発して書く。「正直な話、私もこれまでいろんなことに対して憤慨してきたが、連中がお化けをこんな風に拜んでいるその愚劣さと野蛮さに対してほど憤慨したことも他にはなかった。……くだらないこけおどしの前に、——自分で飾りたて、妙な工夫を凝らしてわざわざ畏怖すべきものに作りあげ、ただもう汚いほろ切れを着せただけの単なる妄想の落とし子の前に、ひれ伏して拜むほど愚劣とも何ともいいようのないほどまでに墮落しきつている連中の姿を見て、私は憤慨しないではおれなかった」(三五三)。

こうしてタタール人の村から村へと旅しながら、クルーソーたちは彼らの偶像を徹底的に破壊していく。タタール地方を経てハンブルグへ至る第二部の後半の旅はクルーソーにとって異教徒との戦いの旅となった。一〇年と五ヶ月のちにロンドンに帰り着く。それは一七〇五年一月一〇日ことであったとある。クルーソーは七三歳になっていた。このように第二部もプロテスタンティズムの主題は全体を貫いていた。

○第三部『ロビンソン・クルーソー反省録』に見るクルーソーの本音

第三部は冒険物語ではなく、エッセイ集という体裁をとっている。しかし第三部には第一部や第二部の事件が言及されていて、その解説になっているところもあるから、著者デフォーの中では全三部がまとまりのあるものとして意識されていたと筆者は考える。前述したように序文でも前の二部について触れている。

第三部の第一章「孤独について」第二章「誠実について」第三章「不道德な会話と下品な言動について」はプロテ

スタントとしてのデフォーの説教として理解できる。第五章「神の声を聞くことについて」は神の摂理は見える者には見えると教えるが、これは当時のプロテスタントには抵抗なく受け入れられたのであろう。神の摂理や霊の存在に疑いを持たなかったデフォーたちプロテスタントにとっては当然の主張であったと思われる。付録「天国についての一つのヴィジョン」で展開される摂理は現代の普通の読者にはなかなか理解が難しいだろう。

筆者にとって注目すべきは第四章「世界における宗教の現状について」と第六章「世界におけるキリスト教徒と異教徒の比率について」である。第四章ではクルソーは世界を旅して多くの国々をみてきたが、キリスト教国がいかに少なく、異教徒の国がいかに多かったかと嘆き、異教徒の国々では人々は野蛮で無知と墮落の中に置き去りにされていると悲憤慷慨する。異教徒への侮蔑は行間に満ちているとさえ言える。そしてキリスト教布教の重要性を繰り返す。「世界の国々でキリスト教が伝えられていれば、その影響は人々を救済するとまではいかないにしても、文明化することはできたであろう」(Reflections, 135)。文明化すれば商売にとっても有利だ。これは他でも述べられている。

興味深いことには支那と日本についての言及もある。支那はその叡智で知られている国だが、その実態はどんなものかとクルソーは問いかけ、皮肉な筆致で批評する。「彼らの宗教は孔子の金言にまとめられているようだが、その道徳的教訓の神学たるや、私に言わせれば、狂騒曲とでも言えるものだ。政治、道徳、迷信を作っている諸要素というか元になるものが、狂騒曲のような言葉でごちゃごちゃと詰め込まれていて、首尾一貫していないし、論理性など少しもなご」(Reflections, 138)。

さらに支那と日本について最も問題となるのは、彼らの優れた政治体制や英知や能力や理解力にもかかわらず、宗教が最も野蛮だということだ。彼らが拝んでいるものときたら世界のいかなる宗教から見ても、理性的に考えても、考えられないほど酷いものだとして、彼らが拝んでいるものはただの「お化け」、人が作り出せる「最も醜い、最も下品な、最もぞつとさせるもの」(Reflections, 139)だと書いている。クルソーはこのような怪物の像に平身低頭する民族を賢い民族と呼べるだろうかと問いかける。

さらに支那が政治体制、工業、特に武器（火薬や銃の製造）の技術、航海術、造船術など、様々な分野でイギリスに劣っていると主張している。第二部の終わりで主張された異教徒批判とキリスト教社会の優位を主張する姿勢はここでも繰り返されているが、その主張はより鮮明に、より強烈になつていと言えよう。

第六章ではクルーソーは自分が旅をした経験から、この地球上でキリスト教国がいかに少ないか、それらがほとんどヨーロッパにあり、異教徒やマホメット教世界と比較すると、ほんの一点に過ぎないことを強調する。南北アメリカも一部の植民地を除いてはほとんど異教徒によって占められているし、アジアの諸地域も、アフリカ大陸もキリスト教徒はほんの一部の地域にしかないという。

さらに原住民のメキシコ人に対してスペイン人らが行った大虐殺は、異教徒の間違いを正すために神が自らの道を示されたものだと言い放ってはばからない。原住民たちは人身御供という野蛮な風習により、多くの何の罪も無い同胞の命を奪っている。そのような風習を続けることで自滅してしまうだろう。そうなるのを防ぐために神はスペイン人をその御使として遣わされ、原住民の彼らを殺したのだ。

「憎しみの神は神意によりこのような民族を地上から追い払い、ひげを生やしたほかの部族を遣わしたのだ。男どもや女どもや子供らを八つ裂きにし、彼らの偶像や邪神崇拜を破壊してしまうためにスペイン人という部族を遣わした。彼らがどのように悪意に満ちていようと、この点に関しては、彼らはかくも罪深い諸民族に遣わされた、神の御使であり、神の下された天罰なのだ」(Reflections, 206) とある。

そしてクルーソーは次のような提案をする。私は異教徒を剣によって改宗させようとしているのではないかと断りながらも、ヨーロッパのキリスト教国の王たちが自分らの利益のために団結して異教徒と戦えば、異教徒の国々を絶滅できるのだがと。キリスト教国としては問題も多いモスクワの皇帝も隣国や世界の協力を得て戦えば、支那を滅ぼすことも夢ではない(Reflections, 207—8)。そしてクルーソーの嘆きは同じキリスト教徒の間での宗派間の争いや残酷な行為などに及ぶのだ。異教や悪魔崇拜と戦うのがキリスト教徒としての本来の仕事なのだから、キリスト教徒の宗派間の争いは止めよと言うのがクルーソーの願いであると言う。

キリスト教に改宗させる目的で上陸する候補地として、マダガスカル島やセイロン島やボルネオ島があげられるが、そこに日本の島々も出てくるのには驚かされる。「日本人というのは非常に分別もあるし、賢い民族だと言われている。政治体制も見事に維持されているようだ。それに道徳的宗教的な支配者の論理や手本から影響を受ける能力は標準以上のものらしい。この目的に関していえば、日本のいくつかの島はうってつけである。強力なヨーロッパの軍隊が上陸する、そして色々な戦闘を繰り返されるだろう。ついに彼らの全軍をやっつけ、そして全国家を支配下に置くのだ」

(*Reflections*, 216)。

その後はどうするか。クルーソーは続ける。「これはキリスト教を広めることを目的とする、悪魔の国に対する戦いなのだから、悪魔の支配下に置かれるものがあつてはならない。……全ての偶像は直ちに破壊され、人々の前で燃やされるべきだ、全てのパゴダも寺も焼却されるべきだ、異教に関わる外観や形式、崇拜に関わるもの全てが抹消され破壊されなくてはならない。さらに僧侶は全て、殺さないまでも追放せよ、あらゆる祭式、儀式、礼拝、祭祀、習慣は完全に廃止させよ、そうすれば時が経つにつれてそういつたことは人々の心から忘れ去られ、次第に行われなくなるだろう」(*Reflections*, 217)。

クルーソーは続ける。こうしてキリスト教に改宗させた民族の子供らに、まずは彼らの恩人の言葉を教える。彼らの支配者ではなく、恩人の言葉を。そのうち古い世代は消えていき、彼らの子孫と征服者の子孫は一つの国民 (*nation*) になっていくのだと。そして「これは私の聖戦である」(*Reflections*, 218) とクルーソーは声を高くして叫ぶ。さらに最後の頁でアフリカにキリスト教の力を及ぼすことは、商売にとつても非常に重要なだと述べている。海賊や泥棒に荒らされている沿岸諸国の交易の安全のためにも、この聖戦は必要なのだと。

こうした声高な、荒々しい聖戦の叫びに対して、スリニヴァス・アラヴァム・ダンは「デフォー・交易・帝国」と題した論を冷静に次のように終わらせている。

クルーソーは『ロビンソン・クルーソー反省録』の終わりまで、異教徒を改宗し、野蛮人を文明化するためには、新しい「聖戦」が必要だと叫ぶことに躊躇などしてはいない。……この冒険物語の多くの近代的な様相は聖戦という古めかしい、時代がかった思考やイスラムや異教徒の殲滅といった考えともつながっている。こうした思考もまたデフォーの冒険思想の中にあること、それらがブルジョワ・イデオロギーの単なる利益追及の動機をはるかに超えている点を認識することが重要だ。(10)

アラヴァム・ダンは指摘するように、クルーソーの宗教的個人主義の究極の目的が「聖戦」へと繋がっていた本音を見落としてはならない。第三部の最後のパラグラフは世界を旅してきたが、キリスト教信仰への熱情の「一言も聞

かれなかつた」(Reflections, 219) というクルーソーの嘆きの声で終わる。キリスト教信仰の衰退を嘆くクルーソーではあったが、彼が声を大にして叫んだ「聖戦」はまさに交易の発展と密接に結びついた、キリスト教の布教という彼の時代思潮を全面的に代弁するものであったことを現代の読者はしっかりと認識すべきであろう。

二 商人

○ 商人デフォアの時代

リンダ・コリーは『イギリス国民の誕生』(Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, 1992) において、一七〇七年から一八三七年の間にイギリス国民国家が創造されていく過程を詳細に分析している。彼女がグレイトブリテン連合王国という国家(nation)誕生の出発点を、ウエストミンスター議会でスコットランドがイングランド及びウエールズとの連合を決めた合同法(The Union)が可決された一七〇七年としていることは、当然のことながら実に重要な意味を持っている。この合同法により、スコットランドとイングランド及びウエールズはベネディクト・アングダーソンがいう「想像上の共同体」として歩み始め、ドーヴァー海峡を隔てた他の国家群と対峙することになった。⁽¹¹⁾

この合同法成立のためにデフォアが果たした役割はデフォア研究者の間ではよく知られている。デフォアは合同法成立のために、ひそかに度々スコットランドを訪ねたり、そこに滞在したりした。デフォアの立場はこの合同法によってイングランドとスコットランド双方の安全が確保されるし、軍事的、経済的にどちらにとっても良いことだといふものであったが、この考えをもとにデフォアは「一七〇六年から翌年にかけて一〇点ほどの論文」⁽¹²⁾を書いた。非国教徒デフォアはもともとスコットランドの長老派教会には親近感を抱いていたし、彼の反カトリックというプロテスタントの立場からジャコバイトによるジェームズ二世復位の画策などには強い反感を持っていたので、長老派のスコットランド教会と英国国教会の併存には異論はなかった。信仰の自由や民意の尊重などを掲げ、両国間の通商や海外との交易での利点について具体的に数字をあげて論じたこれらの論文はスコットランドの民意に大きな影響を与えたと言われる。

デフォーが合同法の利点として最も強調したのは、グレイトブリテン連合王国とその領土の全域で対等な交易の自由が保証され、全ての国内の関税と貿易の障壁が取り払われる点であった。この合同法により国内の商人たちはスコットランド北部からイングランド南部まで自由に商業活動に従事することができるようになった。国内の関税と貿易上の障壁を取り払うこの規定は当時としては時代を先取りしたものだっただけという。

オーストリアは一七七五年まで、フランスは一七九〇年まで国内の関税の障壁を設けていたというから、両国より数十年も前に合同法により、イギリスとスコットランドが障壁の撤廃を決めたことが、いかに時代に先駆けていたかが理解できる。(13)

当時イングランドにはウエールズとスコットランドを合わせた四倍に相当する人口があり、中央集権化された政府があり、主要言語をもち、交通、通信手段も格段に進んでいた。結果的に、合同法はイングランドとスコットランド双方に目覚ましい発展をもたらすことになった。合同法は両国をグレイトブリテン連合王国として一体化させ、その後、続く大英帝国の幕開けとなった。一六六〇年代から急速に進行中であったイギリス商業革命は一段と弾みをつけて進行していくことになる。合同法成立のために、イングランドとスコットランド双方に向けて行われたこうしたデフォーの文筆活動が貴重な役割を果たしたことはもう少し高く評価されても良いかもしれない。

ところでデフォーはプレスビテリアンの司祭にしたいという父の願いにもかかわらず、結局商人として靴下などの卸業についた。やがてワインやタバコの輸入業も始め、伝記によれば二〇代から三〇代にかけて、商売でイギリス国内はもとよりヨーロッパ各地を旅行したと言われる。デフォーの著作に見られる、イギリス国内や外国の商業、産業についての博識、情報量の多さ、正確さは驚くばかりだと評されており、それらが実際の経験にもとづいていることを示している。これらの数多い経済論には商人デフォーの面目躍如たるものがある。

デフォーが生きた時代はまさに商人が国内取引においても、また海外との交易においても、大活躍をした時代であった。一七世紀半ばまではイギリスはヨーロッパを舞台とする交易では遅れをとっていた。覇権はまずオランダとフランスの間で争われていたからだ。一七世紀前半はまずオランダが世界の商業活動の中心として栄えた。その金融業、造船業、海運業は世界を制覇したと言われる。

イギリスは三回にわたるオランダとの戦いに勝利する（一六五二―一五四、一六六五―一六七、一六七二―一七四）。これら

の戦いは主としてイギリスが一六五一年以来航海法を制定して自国の貿易を有利にしようとして起きたとされる。「航海法」(The Navigation Act) はピューリタン革命時の一六五一年クロムエルの時に定められ、その後一六六〇年には第二次航海法、一六六三年には貿易促進条例が制定された。この一連の航海法の狙いは自国の産業と貿易をオランダから守るために、イギリス本国と植民地との輸出入貿易で自国の船舶を使用することを決めたもので、主として中継貿易に依存しているオランダに打撃を与えることを目論んだものであった。これらの戦争に勝利することで、イギリスは船舶トン数、貿易量、海運業などでオランダを追い抜き、海上貿易の覇権をオランダから奪っていったのである。イギリスにとつての次の脅威はドーヴァー海峡を隔てた目と鼻の先にあるフランスであった。当時フランスは人口約二千万、ヨーロッパ最大の国力を持ち、これまたヨーロッパ最大の陸軍を擁していた。太陽王と呼ばれたルイ十四世(在位一六四三—一七一五)は産業保護、海外植民地の拡大、領土拡張につとめており、フランス絶対王政全盛期であった。

イギリスはルイ十四世のカトリック国フランスに対してプロテスタント諸国と同盟を組むなどしてアウクスブルグ同盟戦争(一六八八—九七)、スペイン継承戦争(一七〇一—一四)などを戦い、次々と勝利を収めた。アメリカ大陸で同時進行していた植民地戦争のウイリアム戦争(一六八九—九七)やアン女王戦争(一七〇二—一三)でもイギリスは勝利してユトレヒト条約(一七一三)を結び、これが海外貿易における大英帝国形成の重要な一歩となったことは広く歴史家に認められている。

ユトレヒト条約によって「アシエント」(スペイン領アメリカ植民地へのアフリカ人奴隷を独占的に供給する権限)をフランスから得たイギリスはこの奴隷貿易で莫大な利益を上げることになる。イギリスは奴隷供給地である西アフリカに拠点を点々と築いて支配圏を獲得し、本国、アフリカ、アメリカ大陸を結びわゆる三角貿易を行うことが可能になった。「一七世紀末からの一〇〇年間にアフリカから送り出された奴隷は、輸出先をイギリス領植民地だけに過ぎても、二〇〇万人をこえたといわれる」。(14)

マーカス・レディカーはこの奴隷船のドラマの「いわゆる黄金期は一七〇〇年から一八〇八年までの間で、他のどの時代よりも多くの奴隷が輸送された。その数は全体の三分の二に登る。そして黄金期の数の四〇パーセント以上が、つまり全部で三〇〇万人を運んだのがイギリス及びアメリカの船だった」(15)と書いている。一五世紀から始まるアフリ

リカ大陸から新大陸への黒人奴隷の売り込みはデフォアの時代、まさに最盛期を迎えようとしていたのだ。

デフォアの時代、国内諸産業は海外貿易の拡大と一体化して発展した。海外貿易の発展はまた戦争の勝利とも歩調を合わせて進んだとも言えよう。相次ぐ戦争の勝利はイギリスの国内ではその統治する者と統治される者両者の自尊心をくすぐった。(16)

それまで毛織物を主たる取引としていたイギリスの交易は一六世紀中葉から一八世紀半ばに向けてヨーロッパ以外の世界へと広がった。カリブ海地域の砂糖、北米のタバコ、インドの綿花、支那の茶などの輸入とそれらのヨーロッパ市場や拡大し続ける植民地市場への再輸出を通してイギリスの貿易量は飛躍的に増大した。それに伴い国内の諸工業、製糖業、タバコ加工業、金属加工業や商業の急激な成長が見られた。イギリスは「工業化」前のいわゆる「イギリス商業革命」と呼ばれる時期を迎えていた。

「イギリス商業革命」は農業を含むイギリス経済活動全般の質的、量的な発展をもたらし、その後「生活革命」とも呼ばれる状況を人々に与えることになった。このような「商業革命」の先頭に立っていたのは交易に従事する貿易商人達であった。「ロビンソン・クルーソー」はこのような貿易商人たちの冒険物語であると共に、「交易の勧め」の書でもある。

○ 商人クルーソーの本領と本音

『ロビンソン・クルーソー』第一部の最も流布している箇所はクルーソーの孤島でのサバイバル冒険物語であり、それはまた苦難の中で神の摂理を見出して努力し成功するという「信仰の勧め」の書でもあることは前述した。ここではこの書が「交易の勧め」の書でもあることを考える。

クルーソーは父の忠告にもかかわらず放浪癖につき動かされて水夫になる。何度も遭難するが、性懲りも無くまた船に乗る。確かにそうではあるが、クルーソーはただ冒険心に取り憑かれているわけではない。これらの海の冒険でクルーソーは利益を得ていることも確かな事実なのだから。「父の家を私が出奔した背後にはたしかに悪い力が働いていたと思う。立身出世をしてやろうという乱暴とも無茶ともいえる執念に私が憑かれたのもそのためであった。……私はアフリカの沿岸むけの船に乗った。船乗りがぞくにギニア航路とよんでいる航路だった」(二八)。

船長の勧めで四〇ポンドの玩具や雑貨を持って行ったクルーソーは「ひと儲けするつもりで五ポンド九オンスの砂金をもって帰ったのだが、それがなんとロンドンで売ると三百ポンド近いお金になったのである」(三三〇) (傍線筆者)。やがてギニア貿易商人ということになったクルーソーは、トルコ海賊船に襲われ、ムーア人に奴隷にされる。隙を見てやっと現地人の少年ジュリーと一緒に逃げ出し、海上をさまよっていた時にポルトガル船に救われ、親切な船長のおかげでブラジルに上陸する。大事な仲間であった少年は多少の心の痛みは覚えたが、あっさり船長に譲ってしまう。

ブラジルでは農園の経営を学び、タバコを栽培したりして、裕福な農園主の生活を真似しはじめる。いわゆる植民地の農場経営者になったわけだ。この農園はのちに大変な資産となってクルーソーにかえってくる。ここでの農場主という幸福な将来が見通せたのに、クルーソーはまた海に出る。なぜか。それは「私は一足とびに出世しようと無謀でせっかちな欲望に駆られていた」(五八) (傍線筆者) からだ。農園のために自分たちで黒人奴隷を輸入しようとするのだ。何故ならより一層の利益を上げるために。

「われわれの船はおよそ二二〇トン積みの船で、砲六門、乗組員は船長とその給仕と私のほかに十四名であった。大きな積荷は一つもなく、荷といえただ黒人との取引に手ごろな安ものの雑貨だけであった。例えば、数珠玉、ガラス製品、貝殻製品、その他こまごましたもの、特に小さな銃、小刀、鋏、手斧などであった」(六一)。クルーソーはこうして典型的な奴隷貿易に乗り出すのだ。しかし船は難破し、クルーソー一人が生き残って、孤島に流れ着く。この島はベネズエラのオリノコ川沖、トリニダードの南東、カリブ海の架空の島である。

島に流れ着いたクルーソーがまずしたことは身の安全を守るために木の上で眠ることであった。そしてその後のクルーソーの行動の全ては自分が生き延びるためのサバイバル作戦となる。自分独りの力で生き延びること、これがクルーソーにとって至上命令だ。この部分のみがルソーによって高く評価されたことは前述した。

サバイバルのために、クルーソーは難破した船からありとあらゆる物を運んだ。「船にゆくことも十一回に及んだ。そのあいだ、人間の二本の手でともかくにも運べると思つたものならみな運んだ。いやそれどころではない。もし穏やかな天気さえつづいていたら、正直な話、船をバラバラにしてそっくりもってきたかもしれない」(八〇—八一)。

こうして船から集めた様々な道具類を使ってクルーソーは孤島での生活に必要な品々を揃えていく。生活必需品が整然と並ぶ洞穴を満足げに見たクルーソーは言う。「もし人がこの洞穴を見たら、生活必需品の一大倉庫とみたことであろう。あらゆるものがきちんといつでも取りだせるように並べられてあった。自分の全ての所有物がこんなに一糸乱れずに並んでいるのを見るのは、いや、とりわけ生活必需品がこんなに豊富に貯えてあるのを見るのはひどく楽しいことであつた」(九六)。

山羊を捕えたら、食料として消費することだけを考えないで、家畜として飼ひ慣らして将来に備える。幸運にも芽をだした麦は、栽培して翌年のための種子は保存しておく。慎重に気候を考へて再生産を確実なものにする。テーブルと椅子から始まり、様々な道具を作り、パンを焼き、食料を保存する方法を考え、将来のために備蓄する。

クルーソーにとつて、救出される日まで自力で生き延びることがまず重要なのだ。そして生き延びるためにはこうしたモノが不可欠であることを彼はしっかりと理解していた。モノがなければ、食料や道具や鉄砲や火薬がなければ、一日たりとも生き延びることはできない。モノは彼の生存維持のために不可欠なのだ。だから彼はモノに固執する。彼の世界はモノで溢れ、彼はモノの補充と管理に精出す。クルーソーとモノとの関係は連綿とページを埋めていく。

しかし考へてみると、彼が固執するモノとは全て彼にとつて役に立つモノである。全てのモノの価値は彼にとつての有用性によつて測られる。すなわち彼にとつての利益が最優先するのだ。そこに経済人デフォアの眞骨頂が発揮される。

このクルーソーが砂地に人の足跡を見つけた時の驚きは前述したようによく引用される箇所である。彼はそれまでの神への感謝も忘れて、恐怖のあまり足が地に着かないほど動転して自分の要塞にたどり着く。しかし食人種としての彼らの実態が理解されるにつれて、クルーソーにとつて、彼らは食人種という人類とは違った種、別のカテゴリーに属する他者となるのだ。彼らを殺すことに対してクルーソーには迷いも生ずるが、結局彼らは彼にとつては、有用性でしか測られない他者というモノになっていゝと言へるのではないか。彼らの一人を捕まえれば、奴隷として役に立つのではないか。クルーソーは「どんな犠牲を払つても蛮人を一人手に入れようと覚悟した」(二六八)と書いていゝ。

クルーソーは蛮人の群れから救ひ出した一人を自分の城に連れてくる。「まもなく私は彼に話しかけ、私にも話しかけるよう、言葉を教え始めた。最初に、彼の名前を金曜日ゴールドにきめたといふことをおぼえこませた。彼が私に救われた

日だからだ。わたしは彼をそういうふうになづけてその日の記念にしたかったのである。また同じようにして旦那様マスタという言葉をおぼえさせ、それが私の呼び名であると教えてやった」(二七五—六)。

こうしてフライデーはクルーソーの家来、奴隷、クルーソーが所有するモノになる。クルーソーの回想にはフライデーが父親に再会した喜びを語る場面や彼ら蛮人が人間としての能力においては同じだと言った部分はあるものの、それらは全てクルーソーの立場からの回想に過ぎない。フライデーは「まったく忠実な召使としての真価を遺憾なく發揮してくれた」(三七二)かぎりにおいて、クルーソーには大切な存在であった。

クルーソーのモノへの執着は次の場面で極まるといえよう。クルーソーはブラジルの植民地に残っていた農園が共同経営者によりうまく運営され、相当な利益をあげていくことがわかり、自分の全財産が無事に手許に届いていることを知る。その喜びはあまりにも強烈で、「要するに、私はまっ青になって気が悪くなった次第である。もし老人が大急ぎで強心飲料をもってきてくれなかったら、あまり突然の喜びで度を失ってしまい、その場で生き絶えていたかもしれない」(三七九) (傍線筆者) とクルーソーは書いている。クルーソーは現金で正貨五千ポンド以上の金持ちになり、年収千ポンド以上の不動産をブラジルで持つことになった。(17) 商人クルーソーは若き日に願ったように、一足飛びに出世してめでたく大金持ちになったのである。ここで第一部は終わり、クルーソーの神への祈りに支えられた刻苦奮励の生活はめでたく報われることになった。

第二部は世界を舞台とした海の冒険物語となるのだが、ここでもクルーソーのプロテスタントとしての神との対話という面と商人としての面がはつきりと書かれている。クルーソーが再訪する孤島で確かめたいのは、自分がそこに残してきた農園や植民地コロニの様子であった。島は当然クルーソーの植民地であり、彼はその支配者であった。その植民地でクルーソーは残してきたスペイン人たちに蛮人の女たちを妻としてくじで割り当てる(九七)。まるで動物の雌雄だけを問題とするかのように。

ブラジルに着いたクルーソーは自分の島にいる借地人のために種々のモノを送ってやる。「島にいる私の借地人に私が帆船で送ったいろんな供給品の中には、この他乳牛三頭と、仔牛五頭、豚約二十二頭、孕んだ雌豚三頭、牝馬二頭、種馬一頭が含まれていた。約束に従って、島のスペイン人たちのために私は三人のポルトガル人の女を探し出し、渡航の約束をとりつけた。スペイン人たちにはこの女たちと結婚して親切に遇してほしいと依頼した。女たちをもつ

と多く手に入れることはできなくなかったが、例の異端問題で迫害されている男に（クルーソーはこの男を島に連れて行ってほしいと頼まれて承知していた）娘が二人いたことを思い出した。そういえば、結婚する必要があるスペイン人は僅か五人にすぎなかった。他の者は、他国に住んでいるとはいえ細君がすでにある連中であつた」（二二九）。必要とする男の数に合わせて、同じ数の女が島に送り込まれば、それで十分用は足りるということになる。経済人クルーソーの面目躍如たるものがある。

第二部で現代の読者を圧倒するのはマダガスカル島の現地人部落を焼き払って皆殺しを図る事件であろう。クルーソーは終始批判的な立場をとってはいるが、この事件は当時のヨーロッパ人が原住民に対して行った例の一つに過ぎないであろう。ふとした事件をきっかけに大虐殺に至る経緯がつぶさに描かれている。事件の描写はあまりにも生々しいものである。

航海を続けながらクルーソーは貿易商人としての仕事もしっかりこなしている。シャムでは商品の一部を阿片とアラック酒と交換する。なぜなら「阿片はシナ人の間では非常に高価で取り引きされ、当時需要の大きな商品であつた」（二八五）からだ。クルーソーにとつては阿片もそして奴隷も儲かる積荷だつたと言えよう。商人クルーソーにとつて船乗り稼業は儲かるものであるべきだといふのは自明のことであつた。

タタール人の地方を通つた時、異教徒の偶像崇拜に我慢できなくなつたクルーソーは怒りのあまり彼らの偶像をめちゃめちゃに破壊したし、支那ではその文明や習俗を徹底的に嘲弄したことは前述したとおりである。こうした世界の多くの地の異教徒を文明化することは交易の上からも利益となるとする趣旨は所々で書かれている。

しかし『ロビンソン・クルーソー』という冒険物語の本音の部分は次に取り上げるデフォアの経済的著作の名著である『イギリス通商案』（*A Plan of the English Commerce*, 1728）ではっきりと打ち出されている。ここでは、交易がイギリス国家の利益として強く主張されているからだ。（18）ここには『ロビンソン・クルーソー』でクルーソーが行なっていることの本音がデフォアの経済的主著として主張されているからである。

『イギリス通商案』の要点は何か。ここにはデフォアの自国の利益を最大に追求して人々や自国を富ませようとする本音が書かれている。本書は序文と三編から成り立っていて、各編の各章には詳しい内容が付されている。序文には本書の意図としてこうある。本書は「……わが国の通商がいかなるものでどれほどの規模のものか、どのようにして

現在の規模にまで達したか、そのまま維持し持続させるにはどうすべきか、(そしてこの試みの真の目的であり、またそうあるべきなのだが) どうすればさらに改善し拡大できるかについてのべるものである」(四) (傍線筆者)。本書のタイトルの *commerce* とは諸外国との交易を意味していて、デフォーは主として国内の商工業者に用いた *trade* とは区別して用いている。大まかな区別ではあるが、だから (*A Plan of the English Commerce*) とあるのは未来に向けての交易の計画の意で、現状の分析のみならず将来のあるべき姿を一つの案として提示したものである。

第一編はイギリス通商(商工業、貿易全て)全体の規模と歴史がたどられ、貿易輸出入の現状や規模が論じられる。通商こそが国の富を増すとして、後述する『完璧なイギリス商人』にもある「an Estate is a Pond, but Trade is a Spring.」という名言が語られる。所領に収入を依存している紳士は通商により巨万の富を築く商人には豊さではかなわなくなると書く。この考えは『完璧なイギリス商人』でも繰り返される。第六章ではイギリスが国内産業、諸外国との通商においていかに優れて突出した国であるか、その突出した海運力、有能な船乗りの需要に応える船員の数など、商業國、交易國としてのイギリス賛歌が書かれる。

現代の読者にとって衝撃的なことは第七章の終わりである。第七章のタイトルは「わが国の貿易の規模の大きさについて。わが国のその他の輸出と関連し、特にいわゆる再輸出、すなわち初めにわが国の植民地や国外の在外商館から輸入された商品の輸出を含む説明書付きの輸出と関連して」とあり、再輸出で利益をあげることでできる主な品目として一として胡椒、二としてタバコ、三として砂糖、そして四として奴隷とある。

そこにはこう書かれている。「これらの奴隷はアフリカの在外商館におけるイギリス通商の産物である限り、イギリスの輸出の一部門なのである。……奴隷の数はきわめて多く、またその価格はかなりのものである。アメリカにおける、ニグロの相場は近年どこの植民地でも上がり、年齢、発育、性別に応じ、一人につき二〇ポンドから二五ポンド、三〇ポンドである。そして(貿易が中断されなければ)一年に三万人から四万人、五万人のニグロが運ばれるのが実情だとすると、すべてのニグロがひとり平均二五ポンドのこの貿易額は、年間一二五万ポンドにも達する。ニグロが国内では一人につき三〇シリングから五〇シリング以上はしないことを考えると、これは無限の利益を生む貿易である」(一八四)と奴隷貿易の利点を上げ、その消費地とも言える植民地の拡大の必要を唱えたのである。デフォーによれば奴隷は非常に儲かる積荷であった。

第二編ではイギリス毛織物製造業が衰退していると言われるがそうではないこと、輸出も国内消費も伸びていることを数字にして論じている。第三編では主として海外との通商拡大の必要が論じられる。特にアフリカ北部、北西部、西部のギニア沿岸、またアフリカ東部沿岸におけるイギリス通商の拡大の提案がなされる。通商が発展するためには他国からの妨害が避けられる自国と植民地間の貿易が最も有利だとした。

通商の拡大により自国の産業も発展して国内問題も解決できると言う。「彼ら（国内の貧困層）は貧困のまま植民地へ行き、金持ちになって帰ってくる。あちらで入植し、貿易をし、栄え、人も増える。……だから、植民地が増える」と、疑いもなく通商が拡大するのである。通商の拡大は活動範囲を広げ、社会の繁栄を奨励するためにより多くの人を呼び寄せ、役立たずの多数の貧困層を有益に使用し、広範囲にわたる貿易の、またそれにより本国からのさらに大規模な輸出の、基礎を据える。……植民地の増加は人間を増やし、人間は製品の消費を、製品は貿易を、貿易は海運を、海運は船乗りを増やし、全体でイギリスの国富、国力、繁栄を増大させる」（二七一―七四）と植民地拡大の必要性を説いた。海こそその植民地獲得を可能とするかけがえのない舞台であった。大海に繰り広げられる『ロビンソン・クルーソー』という物語は奴隷貿易を含む大英帝国の発展と形成を中心とする「交易の勧め」の物語であり、デフォールの本音があちこちに散りばめられた冒険物語であったことはあらためて確認されるべきである。

三 中産層

○ 中産層のコンダクト・ブックとして

『ロビンソン・クルーソー』（前述したように三部作だが、よく読まれたのは第一部であった）はクルーソーの自信として出版されるや、著者はデフォーではないかといった批判にさらされたものの評判となり広く読まれた。この本が「新奇な」読み物として広まるには新しい読者層の存在があったことをワットは詳細に論じている。¹⁹『ロビンソン・クルーソー』の読者とは、いわゆる当時増大しつつあった中産層の人々であった。デフォー自身が非国教徒であり、商人であり、なんども破産の憂き目にはあうが、商人としても、ジャーナリストとしても、典型的な中産層の一人と考えられる存在であった。

『ロビンソン・クルーソー』は典型的な中産層の作家が、典型的な中産層のクルーソーを主人公として書いた、ある意味での「成功物語」であったと考えられる。孤島で獅子奮迅してサバイバルを図り、最後には大金持ちになるクルーソーは読者である中産層の人々にとつてはある種の自分らの夢の実現者でもあったから。

実際にはデフォーが『ロビンソン・クルーソー』の種本に使った本の中で起こったことはひどいものが多かったと言う。「せいぜい上手うまくいった場合でも人を鼓舞するようなものではなかった。最悪のケースでは、恐怖に苛まれ、生態学的劣化に追い打ちをかけられ、次第に動物のレベルに退化し言葉も使えなくなり、狂気に陥ったり衰弱して死亡したりしているのである。確実にデフォーが読んだとされる『F・アルバート・ド・マンデルスロの陸上および海上の旅』にはそんな例が二つ載っている。モリリシヤス島で孤独の二年をすごし、生の亀の食事を毎日とつていて、狂気の発作に襲われるようになり、着ている服をずたずたに引き裂いたフランス人の話、および、埋葬された仲間の死体を発掘すると、その棺ひつぎに乗って海に乗りだしていったセント・ヘレナ島のオランダ人の水夫の話⁽²⁰⁾といったものであった。デフォーにとつて『ロビンソン・クルーソー』の結末は断じてそのような悲惨なものであつてはならなかつた。それは中産層のプロテスタントの信仰による勤勉と成功を表す「成功物語」、「セルフ・ヘルプ」の物語、一種の「コングラチュ・ブック」でなければならなかつたのである。『ロビンソン・クルーソー』は当時新しい読者層となつた中産層に受け入れられた。中産層こそデフォーの熱狂的な読者であつた。

イギリス社会は一九世紀中葉以降まで貴族や地主ジェントルマン (Gentry) の支配体制が続いたとされる。爵位貴族は一六八八年の時点で一六〇家族を数えたにとどまり、一八世紀後半になつても一八〇家族あまりにすぎなかつたにもかかわらずである。こうした爵位貴族の下に年収一万ポンドの大地主から五〇〇ポンドの小地主までがいたが、その総数は一七世紀末の二万家族から一七五〇年代には一万八〇〇〇家族に減少した。しかしこの貴族とジェントリー層が実質的なイギリスの支配層であり続けたことは歴史に詳しい。⁽²¹⁾

しかし地主ジェントリーといつても年収一万ポンドを超える大地主から五〇〇ポンドに満たない小地主まで経済的な格差があつた。時代が下がるが、『土地所有者報告書』(一八七四―七六)によると、この時点で「ジェントリーといわれた人は、通常少なくとも一〇〇〇エーカー(一エーカーは約一・二〇〇坪)の土地を持っており、貴族となると一万エーカー以上の土地所有がふつうであつた。これらの土地の大半は家族継承財産認定^{ヘリタナブル・エスティメント}によつて長子に相続された。

そしてこれらの所有地の多くは農業のために借地農に貸し出されたが、地代は一エーカーにつき一ポンド程度であったので、小規模のジェントリーでも年一千ポンドの収入が期待できた⁽²²⁾と言われる。

その下にくるのが、時に擬似ジェントルマンとも呼ばれ、中産層とも中間層とも呼ばれる階層である。法律家・聖職者などの専門職、政府の役人、国内や海外貿易に従事する富裕な商人や階級の高い軍人などが属したが、その下には国内の小売商や卸商たち、さらにその下には様々な職人層や小規模の自作農や住み込み店員など、都市に住み始めた雑多な人々がいた。この中産層も当然ながら年収や社会的地位には大きな開きがあったことは言うまでもないが、彼らもまた裕福な商人達と共に豊かになり増大していた階層だった。

オーガスタン期のロンドンでは個人資産二〇〇〜三〇〇ポンドがあり、年収五〇ポンドがあれば中産層の下限とされ、「心地よい下層中産階級の生活」が送れたと言う。これは労働者階級の年収の三〜五倍に相当していて、「一家族が十分に食べ、使用人を一人雇って生活できるものだった」。そのあたりに中層と下層のラインがあったと考えられる。⁽²³⁾

この幅広い雑多な人々を擁する中産層にはかなりの「同質性」があり、彼らは「資本の人」(people of capital)で「利潤・著積・向上」に関心を持ち、徒弟修業、企業経営、結婚から消費のパターンまで、概して「共通の経験」を分かち「顕著な類似」を示していたとされる。

そして言うならばこの新しく生まれた、雑多で多様な中産層こそ、イギリス商業革命とともに国内に起こった生活革命の影響と恩恵をもろに受けた階層であった。一八世紀を通してそれまで富裕層しか享受できなかった文化を中産層の彼らも楽しみ始めた。デフォアの時代、ティー、コーヒー、タバコ、砂糖は瞬く間に貴族や紳士階級の独占物から中産層の嗜好品になっていった。特にインド産のキャラコや絹地は食料や嗜好品のように消費が限られることがなかったもので、限らない欲望の対象になったと言う。ファッションは上流から下層までの女性たちの欲望をかきたてたから、キャラコの消費は増大し、やがてその輸入量は食料品や嗜好品を超えたという。ファッションが消費をリードしたというのは、現代にも通じて興味深い。

このような幅広い中産層を対象として書かれたのが、デフォアのコンダクト・ブックの数々であり、自分が主幹として精力的に執筆した『レヴュー』紙の記事であり、数々のパンフレットであり、晩年に書かれた『ロビンソン・クルー

ソー』に始まる、のちに小説と呼ばれることになる、教訓を与えることを目的として書かれた小説群であった。

彼らがこぞって読んだのが安価な娯楽的な印刷物や小冊子類や新聞や雑誌であり「小説」であった。ジャーナリズムの発達である。彼らによく読まれた宗教書としてはジョン・パニヤンの『天路歷程』(二六七八)がその代表であろう。さまざまなかンダクト・ブックも求められた。中間層の読者は自らの宗教観、価値観を代表する読みものを求め、デフォーはそしてサミュエル・リチャードソンもまた、中産層の商人として、彼らの求めている内容もその表現形式に求められるリアリズムも自分の体験として心得ていたのである。小説の読者層はその後拡大の一途をたどり、イギリス小説は彼らの関心とともに発展することになった。その中で「誰が紳士か」という階級意識は彼らのマナーや心理と共に関心の最も先鋭な部分となり、小説の主たるテーマとなる。

○「誰が紳士か」

デフォーについてはつきりしていることは、彼は「生まれながらの紳士」(born-gentleman)ではさらさらなかったことだ。デフォーは元々の姓の Foe に ve を付け足して、貴族の苗字らしく見せたと言われている。また Foe に敵の意味があるのを嫌って De foe としたと言いう説もある。真偽のほどは不明であるが、名前を紳士らしく変えたとすれば、デフォーの「紳士」に対する「商人」のコムプレックスを示すものとして非常に興味深い話である。デフォーと中産層の関心の中心には常に「階級」があった。

そもそもデフォーは一七〇一年に『生粋のイギリス人』(*The True-Born Englishman*)を書いている。これは名誉革命でプロテスタント国王として迎えられたウイリアム三世に対する非難に抗議して書かれた長詩である。当時のベストセラーとなった。この一二一六行からなる詩の主題は一体イギリス人とは何者かを問い、ウイリアム三世を外国人だと非難する人たちに一矢を報いたのである。

シーザーの率いるローマ軍の侵入以来、アングル人、サクソン人、デーン人、ノルマン人など外国人が侵入し、ブリテン人と混じり合い、ウエールズ人とスコットランド人が加わり、「このわけのわからぬ、卑しい生まれの群衆からこのイギリス人という 高慢な意地の悪いものが出現した」。²⁴イギリス人とは本来雑種の民族なのだ。「その胸もむかつくようなゴチャマゼの雑種の中の流れているのが純粋なイギリス人の血だと言うのですか」(四二)とデフォー

は歌う。そして「どんな手段であれ 金さえあれば 職人も貴族 ならず者も紳士になるのがここイギリス 家柄や生まれはここでは不要 図々しさと金さえあれば貴族になれる」(四五)とする。しかしデフォーは精一杯の皮肉をこめて詩を次のように終わらせる。「我々を偉大にするものは個人の人格である」(‘Tis Personal Virtue only makes us Great.) (七一) 云々。

ここでデフォーが示したことは全て歴史上の事実であったから、読者は納得せざるを得なかった。「雑多な血の混じり合った、雑種と言えるようなイギリス人」「貴族といっても元をただせば外国からの征服者」と歌ったデフォーの貴族や地主紳士階級何するものかという気概は中産層の人々の心をとらえたのである。

この時代の貴族と地主ジェントリーと中産層、とくに中産層の中でも莫大な利益を上げて大金持ちになった大商人や大貿易商人たちとの関係は実に興味深い話題である。大金持ちの大商人や貿易商人が借金で落ちぶれた貴族や紳士を救うと言う構図として、こうした問題に赤裸々に触れているのがデフォーの晩年に書かれた『完璧なイギリス商人』(The Complete English Tradesman, 1725)と未完の『完璧なイギリス紳士』(The Complete English Gentleman, 1728-29)である。

『完璧なイギリス商人』は二巻からなる。デフォーは trade と tradesman、merchant と commerce といった言葉を基本的には前者を国内商業関係と後者を海外貿易関係に使い分けているようだが、一巻は国内の商業取引に関わりこれから商人として生計を立ててゆこうとする若い人たちへの様々な心得を書いたものである。自分の資力の範囲内で商売せよと借金を戒めたり、帳簿をつけることがいかに大切かと簿記を薦めたりしている。二巻では国内商工業は必然的に海外との交易と密接に関係しているとして、イギリスの商工業を広く他の諸国と比較し交易全体像の把握の必要性を論じている。

全体としてここには当然なこととしておろかな「イギリス商人賛歌」「商業・産業界イギリス賛歌」「貿易国イギリス賛歌」が謳歌されている。例えば二四章の序は「これらはイギリス貴族の中でいくつかの名だたる家系図から抜き出した例である。彼らのいくつかは商業のおかげでその地位が上がり、また他のいくつかは商人の家系との深慮ある縁組みのおかげで家系や財産を守ることができた」(25)として由緒ある貴族たちの家名が二三ページに亘って長々と書き連ねられている。

また二五章の序は始めから終わりまで「商業・交易の勧め」である。「他のいかなる諸国よりもイギリスの商業が優れていることについて。イングランドは世界における最も大きな商業国であること、この国の気候は生活に最適であること、我が国民は最も頑健で優れていること、イングランドの商人は最も清廉潔白であること、国家の富は主として彼らに所有されていること、商業はジェントリー階級の零落を常に救ってきたこと、普通の商人が年収五〇〇ポンドの紳士よりも、多くの金を使えること、所領は池だが商売は泉であるということ、ここでは商人の子弟は勇敢な精神と寛大な心をもっていたなら、最も高貴な家系の子弟にも劣らない、……今日のイギリス国民の発展は征服ではなく、商売によるものだ。地代もいかに商売に頼っていることか」(二四一)とある。

そしてここでも『イギリス通商案』で示した植民地の必要性が強調される。我らの植民地アメリカのシユガー・プランテーションやタバコ・プランテーションで奴隷として働かせるためにアフリカから運ぶニグロは別として、このような植民地には我が国民を住まわせるのだ。グレイトブリテンとアイルランドの臣民だ、主として前者だが。植民地の原住民はより奥地に移住するか、仲間内の喧嘩や裏切りで我々に戦争を仕掛けてきて、撲滅され切り捨てられるかするだろう(二五〇)。原住民についてこのような趣旨のことが当然のこととして書かれている。

デフォーにとつては『イギリス通商案』も『完璧なイギリス商人』も中産層に対して発せられたイギリスをより豊かにし、より発展させるためのメッセージに他ならなかったのである。経済人デフォーの目前にはクルーソーの前に広がっていたような、広い大海があり、それはまさに植民地と繋がり、利益を生み出す無限の可能性を秘めていた。

死の直前に書かれた未完の書『完璧なイギリス紳士』は商人の立場を常に擁護してきたデフォーにとつて最期にあえて強調しておきたいことであつたのではないか。商人も努力すれば立派な紳士になれる、大切なのは人格だということあの『生粋のイギリス人』の最後の行を強調しなかったのではないか。デフォーは紳士には「生まれながらの紳士」(the born gentleman)と「育てられた紳士」(the bred gentleman)があると言つ。(26) 時に (gentleman by birth) とか (gentleman by education) と言つ言葉も使っている(四八)。そして真の紳士とはこの両方を備えた人であるとし、家柄が良くても人格に問題があり、適切な教育を受けていない人は紳士とは言えないとしている。それに対して学校で適切な教育を受けて勉強や読書によって資質を開花させ、努力をして謙虚で礼儀正しい、紳士にふさわしい振る舞いを身につけた人は紳士である。名声や財産や著名な父親や家柄がなくても紳士だと書いた(二五八)。ここには貴族や紳士階級に

対する商人であり、中産層を代表するデフォーの本音と自負心がみられる。

この時代、貴族や紳士階級と富裕な商人達との間の階級を越えた結婚 (cross-class marriage) はデフォーが書き並べたように、それまでの時代以上にしばしば見られるようになった。裕福な商人達は子弟の教育でも貴族や紳士の世界に入り込んでいた。こうした傾向はその後に続く階級と階級が攪乱される時代により強まっていくことになる。

この書には興味深いことには商人に紳士たる道を説くとともに所領を管理する典型的なカントリー・ジェントリーにも彼らの紳士のあり方を教えている箇所がある。生まれながらの所領を持つ紳士のなすべきことは「貸している土地の管理をし、父から受け継いだ土地差配人達と話し合い、それから借地人達とも話し合って、所領そのものについて、それから所領の状態について主人として熟知していること、そして古い借地権の切れたところには新しい借地権を命じ、農場や納屋の修理を命じ、新しいものを建てさせ、貧しい農民のために古くなって倒れたいくつかの Cottage は建てかえてやる、要するに借地人達を元気づけ、所領を改善できることは全てする、そして借地人達に領主がここに共に住んでくれるつもりだということをはっきりさせるように」(二六九―七〇) するのが大事だとした。このようにできる者は立派な紳士であると言う。

ここには所領を管理するものが心得るべき全てが記されている。デフォーはこの書で紳士たるものの資格はその人間性にあることを強調した。それは「生まれながらの紳士」にも「育てられた紳士」にも、すなわち貴族や紳士階級にも商人階級にも同じように求められるものだったのである。ここには真の紳士像の提示があり、ジェントルマン・イデアールの模索があり、特にヴィクトリア朝小説で扱われる「誰が紳士か」という主題の萌芽があると言えよう。

おわりに

『ロビンソン・クルーソー』は上述したような特色を備えて、イギリス小説の〈始まり〉となった。まずクルーソーの内省的な一日一日が聖書からの引用とともに克明に記録されるという形をとったこの書は宗教的な個人心理への関心が物語の主題となる道を拓いたとワットは指摘する。ワットによればこの傾向はサミュエル・リチャードソン、ジョージ・エリオット、D・H・ローレンスといった小説家に引き継がれた。「彼らは皆、人生を絶えざる道徳的、社

会的闘争とみなす極めて生彩に富む人生観の持ち主であった。彼らは皆、日常生活における一つ一つの出来事は、理性と良心を精一杯働かせないと正しい行動ができない、本質的に道徳と関わる問題を提起するものであるとみなしていた。彼らは皆、内省と観察によつて道徳的確信がもてる個人的な体系を創ることに努めた⁽²⁷⁾と『ロビンソン・クルーソー』の影響を論じている。これらの作家たちは自己と向き合う心情の真摯さにおいて、プロテスタントが持つ生真面目さを受け継ぐと言えよう。

J・M・クッツェーは『ロビンソン・クルーソー』論で、デフォアのクルーソーの描き方は時に優れたひらめきを見せるものの、「デフォアは、魂とその動きを分析するのにあまりにもキリスト教的治療学にたよっているので、本質的に近代人とは言えない」⁽²⁸⁾と喝破している。デフォアが描くクルーソーの内面生活の苦悩はある意味で常にプロテスタンティズムに回収されてしまうからだ。クルーソーの苦悩する自己は近代人としてはあまりにも宗教的すぎると言うか単純すぎると言えるのかもしれない。しかしその傾向はいみじくもワットが指摘するようにその後のイギリス小説の顕著な一特徴となつていったこともたしかな事実である。

さらに、クルーソーやプロテスタンティズムが持つこの生真面目さ、内省を特色とする道徳性、はまた世俗化した国教会批判へと向かう流れも作つたのではないかと筆者は考える。国教会の世俗化した聖職者たちはしばしば時に揶揄、時に憐憫、時に怒りの対象としてイギリス小説に登場する。ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』(一八一三)のコリンズ牧師や『エマ』(一八一六)のエルトン牧師、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』(一八七二)のカゾーボン師など、たちまち何名かの名前があがるだろう。トマス・ハーデイの『日陰者ジュード』(一八九六)では制度としての国教会そのものが無くなるべきだとしてジュードによつて弾劾される。『日陰者ジュード』では国教会制度はスー・ブライドヘッドに狂気を、ジュードに死をもたらす。

またクルーソーの経済性を優先する考えは女の扱い方で顕著に見られる。女は男の数に合わせて調達される。クルーソーの経済的個人主義、すなわち自分にとつての有用性が何よりも優先すると言う思考パターンはどのようなその後小説の流れと関係するのだろうか。クルーソーにあつては自然の美や芸術の審美的な世界は存在しないとされる。このことはその後のイギリス小説になんらかの影響を与えているのではないか。女も女であれば良いのでくじで相手を決める。女もこの有用性、経済優先の秩序を維持するための必需品の一つに過ぎないと考えられている。

『ロビンソン・クルーソー』のこうした「女」の「描かれ方はその後のイギリス小説の女たちの描かれ方とは無関係とは言えないであろう。一八世紀から一九世紀の半ば過ぎまで、イギリス小説にとつて性はタブーであった。トマス・ハーデーはそれまでのイギリス小説の女たちはただの人形にすぎないとして、初めて女性のセクシュアリティを赤裸々に描いた。それまで「女性の身体は結婚と家庭というドメスティック・イデオロギーに支配され、聖なる母性という「制度」の美名のもとに機能し、階級と帝国の安泰と植民地支配の推進というナショナル・イデオロギーの機能の中に取り込まれ」²⁹ていた。同時代のフランス小説の女性が官能性豊かに描かれていたのに対して、イギリス小説ではハーデーによって初めて知性も肉体も備えた等身大の女性が描かれることになる。『ロビンソン・クルーソー』でモノのように扱われる蛮人の女たちやスペイン人にあてがわれるために島に連れて行かれるポルトガル人の女たち。モノとして描かれた女たちはヴィクトリア朝の「制度」の中に取り込まれて描かれたイギリス小説の女たちとどこかで繋がっているのではないか。

モノとして扱われたフライデーの末裔たちはどうなったか。イギリス小説は確実にある意味において、国教会体制や貴族・地主ジェントリーの支配体制、ひいては植民地拡張という大英帝国の国策に対する「否」³⁰を発信し続けてきたと言える。それぞれの作家が様々な状況や体制に抵抗する人間としての声をあげてきたことは事実であろう。エリザベス・ベネットもジェイン・エアもドロシア・ブルックも、ジュード・フォーリーも。トマス・ハーデーはウエセツタスの畑に立ち上がり、拳を振り上げたし、³⁰ ジョゼフ・コンラッドはアフリカの『闇の奥』(一九〇二)でクルツの鋭い叫びを伝えた。しかしその陰でフライデーの末裔たちは奴隷として残されていた。『マンスフィールド・パーク』(一八一四)のアンティガのように当然のものとしてさりげなく、あるいは『ジェイン・エア』(一八四七)の屋根裏の狂女として隠されてそこいた。「植民地」はごく当たり前のものとして登場人物たちの周りに存在し、「大英帝国」は日常の舞台であった。

フライデーはクルーソーから名前を与えられ、彼を旦那様^{マスケ}と呼ぶように言われ、主人の言葉を自分の言葉として覚えさせられる。それがフライデーというものと、人々は理解していた。未開人が文明人の言葉を覚えるのは当前のことだと。少なくとも、J・M・クッツエーの *Foe* (1986) が書かれるまでは。クッツエーのフライデーには舌がなかった。クッツエーの *Foe* はまさに舌があっても語る言葉を持たないデフォ어의フライデーを語る物語となった。

デフォーとクルーソーが体現する中産層の階級意識、その階級上昇志向、そして「誰が紳士か」という問いもまたイギリス小説のもっとも興味ある主題となつて繰り返し扱われてきた。個人と個人の社会的な人間関係を主要な関心とした小説にとつて、階級という社会現象が人間関係に及ぼす様々な心理状況ほど格好の主題はない。階級が問題にならないイギリス小説はないとさえ言われる。見知らぬイギリス人二人が向かいあえば互いの階級を探り合つてゐるとか。貴族やカントリー・ジェントリーの所領のあがりによって依存した地位が、新興の大商人らに脅かされ、「階級」が攪乱される。「階級」は小説の格好の主題となつていった。

今日、第二次世界大戦後独立を果たした、大英帝国の元植民地の国々から舌を得たフライデーたちが紡ぎ始めた文学が花開いている。彼らは自らの状況を語り始めた。彼らの多くは英語で書く（脱英語を試みて自らの言語で書くことを実験する作家もいるが）。伝統的な英文学は彼らによつて解体され、従来の英文学の枠では捉えられないと言われる。しかしまた彼らはデフォー以来のイギリス小説の伝統をまるで自らの伝統のように受け入れて書いているようにも見える。イギリス小説のあの長い伝統は彼らの用いる英語のなかで蠢いて、生きていることも否定できない。彼らは英語という言葉のなかで影響などという言葉では片付けられない「深い影響」を受けている。彼らは彼らを支配していた人たちの言葉を使つて書く。ポストコロニアリズムの時代、本国も元植民地も含めて世界各地で「宗教」「人種」「階級」「ジェンダー」「言語」「マナー」「金」などをめぐつて展開する悲喜劇が、今や「世界文学」という「英語文学」として語られ始めた。

ポストコロニアリズム、ポストモダンイズムの現代にあつて、『ロビンソン・クルーソー』が書かれてから三〇〇年にわたるイギリス小説の流れを顧みるとき、『ロビンソン・クルーソー』は確実にイギリス小説の様々な流れの源泉であつたことをあらためて考えさせられる。その源泉は実際にどのような流れとなつて三〇〇年を流れたか。その大河の中でイギリス小説は何をどのように問うてきたのか。そしてその流れは今後何をどのように問うていくのか。混沌の中で未来を模索する二一世紀にあつて、「英語文学」の源流として『ロビンソン・クルーソー』の重要性はあらためて強調されるべきである。

注

- 1 Ian Watt, *The Rise of the Novel* (Chatto & Windus, 1957) 以下本書からの引用は『小説の勃興』藤田永祐訳を使わせて頂いた。
- 2 M. グリーン『ロビンソン・クルーソー物語』岩尾龍太郎訳、みすず書房、一九九三、五七頁。
- 3 岩尾龍太郎『ロビンソン変形譚小史』みすず書房、二〇〇〇年、一五九―一六〇頁。
- 4 塩谷清人『ダニエル・デフォーの世界』世界思想社、二〇一三、三〇―三二頁。デフォーの著作の全てを取り上げているこの著書はわが国における初めて秀れた試みで、わが国では入手可能な資料も含めて、デフォーの全貌を知るには必須の書である。この書から教えられたことは多かった。
- 5 塩谷 一〇六ページ。
- 6 Maximilian E. Novak, *Daniel Defoe: Master of Fictions* (Oxford, 2001), pp. 555-56.
- 7 Maximilian E. Novak, *Transformations, Ideology, and the Real in Defoe's Robinson Crusoe and Other Narratives* (University of Delaware Press, 2015), pp. 84-86.
- 8 ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』上下平井正穂訳、岩波書店、一九六七、一九七一、七頁。『ロビンソン・クルーソー』第一部と第二部の引用は本書に拠る。引用箇所は本文中に訳書の頁数を記した。
- 9 Daniel Defoe, *The Novels of Daniel Defoe, Vol. 3: Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, ed. G. A. Starr (Pickering & Chatto, 2008), p. 51. 以下「」の書からの引用は *Reflections* として本文中に頁数を記した。
- 10 Srinivas Aravamudan, 'Defoe, commerce, and empire', *The Cambridge Companion to Daniel Defoe*, ed. John Richetti (Cambridge UP, 2008), p. 62.
- 11 Linda Colley, *Britons: Forging the Nation, 1707-1837* (Yale UP, 1992), p. 6.
- 12 塩谷 一六一頁。
- 13 Colley, p. 18.
- 14 今井宏編『イギリス史2』山川出版社、二〇〇五年、三七九頁。
- 15 マーカス・レディカー『奴隸船の歴史』上野直子訳、みすず書房、二〇一六年、五頁。
- 16 Colley, p. 53.
- 17 ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』武田将明訳、河出文庫、二〇一一年、四五八頁。
- 18 ダニエル・デフォー『イギリス通商案』泉谷治訳、法政大学出版局、二〇一〇年。この書の訳文は本書に拠らせていただいた。引用箇所は本文中に頁数を記した。書のタイトルも *commerce* とはデフォーによって主として外国との交易を意味して使われているし、*plan* も将来のあり方を示してい

ると考えられるので、この書名訳がもつとも妥当だと考える。

- 19 Wat, pp. 35-59.
- 20 *Ibid.*, p.88.
- 21 今井宏編『三六三―六四頁』。
- 22 村岡健次・木畑洋一編『イギリス史3』山川出版社、一九九一年、一二五頁。
- 23 関口尚志・梅津順一・道重一郎『中産層文化と近代』日本経済評論社、一九九九年、三二頁―四一頁。ここに紹介した中産層に関しては、関口尚志「中産層文化とデフォワーの世界」から教えられるところが多かったことを記して謝したい。
- 24 Daniel Defoe, *The Shortest Way with the Dissenters and Other Pamphlets* (Basil Blackwell, 1927), p.37. 以下本書からの引用は本文中に頁数を記した。訳文は拙訳による。
- 25 Daniel Defoe, *The Complete English Tradesman Vol. I, II* (Oxford AMS edition, 1973), Vol. I, p. 227. 以下本書からの引用は本文中に頁数を記した。訳文は拙訳による。
- 26 Daniel Defoe, *The Complete English Gentleman* (David Nutt, 2011), p.3. 以下本書からの引用は本文中に頁数を記した。訳文は拙訳による。
- 27 Wat, pp. 84-85.
- 28 J. M. Coetzee, *Stranger Shores: Essays 1986-1999* (Vintage, 2002), p. 23.
- 29 土屋倭子『女とごう制度』南雲堂、二〇〇〇年、六九―七〇頁。
- 30 R. G. Cox, ed., *The Critical Heritage: Thomas Hardy*, 1979 (Routledge, 1995), p. 269. ハーディの友人 Edmund Gosse は *Cosmopolis* 誌(一八九六年一月号)で、『日陰者』ジュード』論を発表したが、その中で社会体制への怒りを爆発させたハーディをこのように評したことが知られている。

参考文献

- Coetzee, J. M. *Giving Offense: Essays on Censorship*. The University of Chicago, 1996.
 —— *Stranger Shores: Essays 1986-1999*. Vintage, 2002.

- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. Yale UP, 1992.
- Defoe, Daniel. *The Shortest Way with the Dissenters and Other Pamphlets*. Vol.14. Bazil Blackwell, 1927.
- _____. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe of York, Mariner, The Farther Adventures of Robinson Crusoe*. Everyman's Library, 1960.
- _____. *The Novels of Daniel Defoe*, Volume 3: *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (1720) ed. G. A. Starr. Pickering & Chatto, 2008.
- _____. *Moll Flanders*. The Modern Library College Edition, 1950.
- _____. *The Complete English Tradesman*. Vol. I & II. D. A. Talboys, 1841. AMS Press, 1973.
- _____. *A Plan of the English Commerce*. Basil Blackwell, 1927.
- _____. *The Complete English Gentleman*. David Nutt, 2011.
- Hobsbawm, E. J. *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*. Cambridge, 1990.
- Maniquis Robert M. and Carl Fisher ed. *Defoe's Footprints: Essays in Honour of Maximilian E. Novak*. University of Toronto Press, 2009.
- Moore, John Robert. *Daniel Defoe: Citizen of the Modern World*. The University of Chicago Press, 1958.
- Novak, Maximilian E. *Economics and the Fiction of Daniel Defoe*. University of California Press, 1962.
- _____. *Realism, Myth, and History in Defoe's Fiction*. University of Nebraska Press, 1983.
- _____. *Daniel Defoe: Master of Fictions*. Oxford UP, 2001.
- _____. *Transformations, Ideology, and the Real in Defoe's Robinson Crusoe and Other Narratives*. University of Delaware Press, 2015.
- Parrinder, Patrick. *Nation & Novel*. Oxford UP, 2006.
- Richetti, John, ed. *The Cambridge Companion to Daniel Defoe*. Cambridge UP, 2008.
- Said Edward W. *Orientalism*. 1978. Vintage Books, 1994.
- _____. *Culture and Imperialism*. 1993. Vintage Books, 1994.
- Watt, Ian. *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding*. Chatto & Windus, 1959.
- Woolf, Virginia. *The Common Reader*. The Hogarth Press, 1953.

和書・訳書

岩尾龍太郎『ロビンソンの砦』青土社、一九九四年。

『ロビンソン変形譚小史』みず書房、二〇〇〇年。

マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、一九八九年。

ジョイス・M・エリス『長い18世紀のイギリス都市：1680-1840』松塚俊三・小西恵美・三時真貴子訳、法政大学出版局、二〇〇八年。

大塚久雄『近代化の人的基礎』岩波書店、一九六九年。

川北稔『民衆の大英帝国——近世イギリス社会とアメリカ移民』岩波書店、二〇〇八年。『世界システム論講義』筑摩書房、二〇一六年。

川北稔編『ウォーラーステイン』講談社、二〇〇一年。

川北稔・指昭博編『周縁からのまなざし——もうひとつのイギリス近代』山川出版社、二〇〇〇年。

木畑洋一『大英帝国と帝国意識』ミネルヴァ書房、一九九八年。

M. グリーン『ロビンソン・クルーソー物語』岩尾龍太郎訳、みず書房、一九九三年。

P. J. ケイン・A. G. ホブキンズ『ジェントルマン資本主義の帝国I, II』名古屋大学出版会、一九九七年。

近藤和彦『文明の表象 英国』山川出版社、一九九八年。

近藤和彦編『長い∞世紀のイギリス…その政治社会』山川出版社、二〇〇二年。

サスキア・サッセン『グローバリゼーションの時代…国家主権のゆくえ』伊豫谷登士翁訳、平凡社、一九九九年。

塩谷清人『十八世紀イギリス小説』北星堂書店、二〇〇一年。

塩谷清人『ダニエル・デフォーの世界』世界思想社、二〇一一年。

『思想』特集『世界史』をいかに語るか——グローバル時代の歴史像——岩波書店、二〇一八年三月号。

関口尚志・梅津順一・道重一郎『中産層文化と近代』日本経済評論社、一九九九年。

土屋倭子『〈女〉という制度』南雲堂、二〇〇〇年。

土屋倭子『トマス・ハーディの文学と二人の妻』音羽書房鶴見書店、二〇一七年。

角山栄『生活の世界歴史10 産業革命と民衆』河出書房新社、一九八〇年。

角山栄『生活史』の発見——フィールドワークで見る世界』中央公論社、二〇〇一年。

- 角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国…イギリス都市生活史』平凡社、一九八二年。
- ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』上下平井正穂訳、岩波書店、上(第一部)、一九六七年、下(第二部)、一九七一年。
- ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』武田将明訳、河出文庫、二〇一一年。
- ダニエル・デフォー『ロクサーナ』宮崎孝一訳、池田書店、一九八〇年。
- ダニエル・デフォー『イギリス通商案』泉谷治訳、法政大学出版局、二〇一〇年。
- ニール・ファーガソン『大英帝国の歴史』上下、山本文史訳、中央公論社、二〇一八年。
- ジョン・プリュア『財政Ⅱ軍事国家の衝撃…戦争・カネ・イギリス国家1688-1783』大久保桂子訳、名古屋大学出版会、二〇〇三年。
- 宮崎孝一『ダニエル・デフォー…アンビヴァレンスの航跡』研究社出版、一九九一年。
- 村岡健次・木畑洋一編『イギリス史』山川出版社、一九九一年。
- マーカス・レディカー『奴隷船の歴史』上野直子訳、みすず書房、二〇一六年。
- イアン・ワット『小説の勃興』藤田永祐訳、南雲堂、一九九九年。